

## 在来マス類の放流に関する研究—IV

### 臀鰭切除後の再生について

岡崎 稔・立川 互

サケ科魚類の部分標識として脂鰭を切除する方法は、魚体に与える損傷が小さく、しかも再生し難い点で優れているが、2種以上の区分を要する場合は、他の標識と併用する必要がある。臀鰭の切除については、青森水試<sup>1)</sup>によると、5尾の試験中3尾に再生がみられたが、成育段階あるいは期間によっては利用し得るのではないかと考え本試験を実施した。

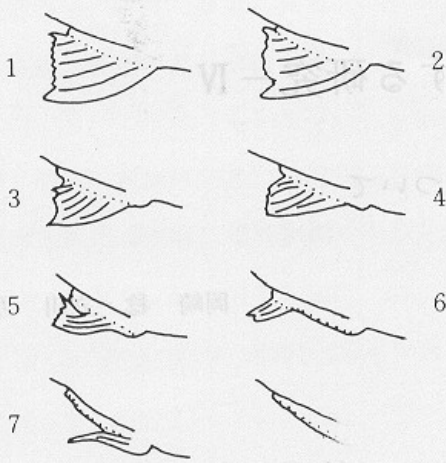
### 試験の方法

1970年10月30日に、アマゴ (*Oncorhynchus rhodurus*) 1年魚の銀毛型 216尾 (平均体重69g) の臀鰭を基部からはさみで切断し、その後池中飼育をして再生の程度を観察した。飼育期間中の水温は開始時12°C、冬期約4°C、夏期約20°Cであった。

### 結果および考察

わずかに再生のみられ始めたのは、切除後6ヶ月頃からであった。1971年5月1日の測定では、平均体重218gで約3倍に成長していたが、202尾中11尾(5%)に2~3mmの伸長が認められたに過ぎない。約10ヶ月後の1971年8月13日の測定では、平均体重462gで切除後6.7倍に成長していたが、167尾中対照(第1図-1)と識別が困難なほどに再生したものの(第1図-2)が5尾(3%)、変形して再生しているもの(第1図-3~5)が27尾(16%)、僅かな一部再生のみられるもの(第1図-6~7)が27尾(16%)あり、依然として殆んど再生のみられないもの(第1図-8)は108尾(65%)であった。再生程度の個体差については、切断の位置によるものと考えられ、十分根元で切断されたものでは再生が悪く、基部から離れるに従い再生し易いのではないかと推定された。従って1年魚の標識としての臀鰭切除は、注意深く正確に基部で

切断されるならば1ヶ年位はほぼ有効と考えられた。



第1図 臀鰭切除後10ヶ月の再生  
 1.対照 2.完全に近い再生 3~5.変形した再生  
 6~7.一部再生 8.再生なし

## 文 献

- 1) 青森水試, 1970; マスのヒレの再生について, 昭和44年度水産庁指定研究「在来マス類増殖研究」最終報告。